

P1-24-3 当科での子宮腫瘍に対する needle biopsy の経験

新潟大

田村 亮, 西川伸道, 萬歳千秋, 西野幸治, 加嶋克則, 八幡哲郎, 榎本隆之

【目的】子宮腫瘍の針生検の意義につき, 検討する。【方法】2005年1月から2012年8月に画像所見で悪性が疑われた子宮腫瘍146例に対しインフォームドコンセントを得た後, パードマグナムを使用し, 18G針で超音波ガイド下に針生検を行った。結果, 治療法, 画像所見, 病理結果, 良性例の経過などを後方視的に検討した。【成績】年齢は21~83歳(中央値47歳)であった。針生検の結果は, 悪性例は23例, 良性例は115例, 壊死や十分な検体量の採取が取れず判定困難となった症例が9症例であった。判定困難の症例のうち7例が再検または手術施行し悪性が4例, 良性が3例であった。良性のうち74症例で手術を施行した。術後に悪性と判明した症例はSTUMP2例, 子宮体癌1例, low grade ESS1例であった。手術症例で感度86.9%, 特異度100%, 陽性的中率100%, 陰性的中率95.9%であった。保存的に経過観察をし, 観察範囲内(4~92カ月, 中央値41カ月)での悪性所見を認めなかった。合併症は平滑筋肉腫症例で施行後1カ月以内の感染を3例で認めた。【結論】一部の低悪性度症例を除き針生検の正診率は良好であり, 3次元的に精度が高い狙い組織診をすることで画像診断が困難な症例での組織学的精査に有用な可能性がある。一方感染や採取困難, 判定困難もあり画像評価での症例の選択が重要である。良性例の経過は良好であり画像診断にて悪性所見を疑う症例で術式や保存的治療を選択する際に有効であると考えられた。

P1-24-4 針生検標本 HE 所見と臨床所見を用いた子宮平滑筋肉腫と異型筋腫の鑑別に関する検討大阪市立大¹, 住吉市民病院², 大阪市立総合医療センター³村上 誠¹, 市村友季¹, 松田真希子¹, 笠井真理², 川村直樹³, 福田武史¹, 吉田裕之¹, 橋口裕紀¹, 松本佳也¹, 安井智代¹, 角 俊幸¹, 石河 修¹

【目的】針生検標本の HE 染色所見に臨床所見を加味した評価を行うことにより, 子宮平滑筋肉腫と異型筋腫の術前鑑別診断が可能かどうか検討を行った。【方法】当院倫理委員会承認のもと説明と同意を得て針生検を行った子宮平滑筋肉腫(LMS)7例と異型筋腫(AL)8例を対象とし, 各症例の核分裂指数(MI)・異型分裂像(AM)・凝固壊死像(CN)をHE染色標本で鏡検し, 臨床データ(閉経の有無ならびに血清LD値)の集積を行った。MIを0-1・2-10・11以上の3段階に分け各0点・1点・2点とし, AMとCNについてはその有無により0点・1点とした。臨床所見についても閉経症例を1点・LD値の正常上限値比1.2以上を1点とし, 合計スコアによる評価を行った。【成績】因子ごとの検討ではLMSとALの血清LD値によるスコアの中央値(LMS1点・AL0点)に有意差($p<0.05$)が認められたが, その他の因子におけるスコアに有意差は認められなかった。両者の合計スコアの中央値はLMSが3点(3~5点)・ALが1点(0~2点)で, LMSで有意に高い結果となった($p<0.01$)。【結論】針生検標本 HE 所見と臨床所見による評価で, 子宮平滑筋肉腫と異型筋腫を術前に鑑別することができる可能性が示唆された。

P1-24-5 超音波組織弾性診断を施行した子宮平滑筋腫瘍の2症例

福島県立医大

古川茂宜, 添田 周, 渡辺尚文, 西山 浩, 藤森敬也

【目的】近年乳癌や甲状腺癌の鑑別や, 肝線維化の評価に超音波組織弾性診断(以下 elastography)を使用する報告がみられ, 臨床で広く用いられるようになってきた。しかし, 婦人科腫瘍の診断に elastography を使用した報告はこれまでみられない。子宮平滑筋肉腫は画像上多彩な所見を示し, 子宮筋腫との鑑別が困難なことがある。今回平滑筋肉腫と筋腫の鑑別における, elastography の有用性について検討した。【方法】子宮平滑筋肉腫の1例と子宮筋腫の1例に対し, 術前に elastography を施行した。超音波は ACUSON S2000 (Mochida SIEMENS) を使用し, VTTQ study を行った。平滑筋肉腫では腫瘍表面から1cm, 2cm, 4cm, 6cmの4か所で, 筋腫では筋腫核内の4箇所 ROI を設定した。各々でせん断弾性波速度 (shear wave velocity: Vs) を5回測定し, 平均±標準偏差を測定結果とした。比較検討は統計処理法として Bonferroni 法を用い, $p<0.05$ をもって有意とした。また, 平滑筋肉腫においては ROI を設定した4箇所において, Vs 値と摘出標本の病理所見を比較した。病理所見は, viable な腫瘍組織, 凝固壊死, 線維化もしくは硝子変性それぞれが占める面積の割合に分けて評価した。今回の検討は本学の倫理委員会の承認を得た。【成績】平滑筋肉腫では4箇所 Vs の有意差を認め, 筋腫では4箇所 Vs の有意差を認めなかった。平滑筋肉腫において, 最も高い Vs 値を示した部分は viable な組織が90%を占めた箇所であった。また, 逆に最も低い Vs 値を示した部分は壊死が90%を占めた箇所であった。【結論】 elastography で子宮平滑筋腫瘍の内部硬度を測定することは, 良悪性の鑑別に有用である可能性が示された。